IS　_ロスト_ナンバリング

imomushi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　―ロスト―ナンバリング

【Ｎコード】
Ｎ５７３３Ｚ

【作者名】
ｉｍｏｍｕｓｈｉ

【あらすじ】
ＩＳの誕生から、偽者の主人公が生み落とされる。彼はＩＳを操縦できることを嫌い、ＩＳの世の中を病んでいるように感じていた。そんな中でとある理由から、ＩＳ学園に入らなければならない状況に陥る。彼の中で、望まない学園生活が始まった。

１－０＿３年前（前書き）

掲載されている皆様の作品を読ませて頂いて、投稿してみたくなりました。初めての投稿になりますが、よろしくお願いします。この作品は独自の解釈があり、ＩＳの概念に対してアンチテーゼの傾向があります。また、読まれる方によっては、気分を害される要素が含まれる可能性があります。読まれない場合はお戻りいただけると助かりますので、どうぞ宜しくお願い致します。

1—0_3年前

—0／—

爆撃音はいつまでも続いていた。中東の昼間は暑いが、僕がいるブリーフィングルームはとてもひんやりとしている。

——以上がテロ組織の中枢人物に当たる。貴君らの任務はターゲットの速やかな排除だ。活動時間３０分以内で、できるだけ被弾を避けて帰還しろ」

僕を含めて言われた3人のうち1人が擬似トレーラーの電動シャッターの扉を開くと、ざらついた熱風の感触が頬を撫でつけ始める。砂漠の砂が当たって、ここがアメリカじゃないと実感した。

「サーフォ、貴方は暴走しやすいから最後尾で付いてきなさい」

何時ものうるさい女が語気を強めて喋ってくる。いつも、行動を全然自由にさせてくれないこいつが、僕は大嫌いだ。いつも命令無視とか言っていじめてくる。

「何で？だって、これから悪い奴の頭を消し飛ばしに行くんでしょ」

女は露骨に嫌そうな顔をしていて、いつものもう1人の女は対照的に哀しい顔をしていた。もう一人の僕を叱らないあんたは、なんでいつも泣きそうな顔で僕を見るの？

ホームでやってるゲームで、僕はいつも高得点を叩き出す。そうすると、周りの大人はみんなうれしそうな顔をするんだ。僕は褒めら

れたようで、それがうれしかった。だったら実戦でも、もちろん一番乗りで高得点を叩き出したい。

「いつものゲームと同じでしょ。獲物は早い者勝ち、邪魔する奴は脆い雑魚敵じゃない」

僕はＩＳを直ぐに展開させると、レーダーで設定された目標へ向かって飛び出す。体に掛かる重みが気持ち良い。

ヒュンッ！！

音を立てて通り過ぎ去る砲弾を目で追いながら、自分の口の端が吊り上るのがわかる。ぞくぞくする。そこで、ガシリと何か力強く肩を捕まれた。

反動で体が反り返り、両足が振り子のようにあがる。僕が後ろを向くとフルフェイスマスクのＩＳを着た女が肩を掴んでいた。そして僕の首を掴むと、いきなり腕を引いて自分のヘルメットを僕のヘルメットに押しつける。

『良いか欠陥モルモット、良く聞け。リーダーは私だ。お前はペナルティ加算が溜まっていて、これ以上勝手な行動するなら作戦に支障が出かねない。次に違反を犯したら私がお前を強制的にラボへ戻してやる。行くぞ、ナイザ』

バイザー越しに女のくぐもった声が聞こえた。声に怒りを感じる。僕が空中で静止している間に女達は２人で共に先へ飛んでいく。

……ふざけるな。

お前が僕をあの場所に戻す権利なんてない。そうさ、お前なんか邪魔だ。お前がいなければ、僕はもっと自由に動けるんだよ。だいたい、僕より弱いくせに歳が上なだけでうるさいんだよ。

やっちゃおうか。
やっちゃおう。
そうだよ。
そうしよう。
そうしなきゃ。

僕は無言のまま銃口を女に向ける。ロック表示がオレンジから赤に変わった。エラー音？そんなの関係ないよ。

「バイバイ、邪魔ばっかりの嫌な奴。大嫌いだったよ」
『おま――――

枯れ木をぼっきりと真っ二つに折るような感じかな。僕は通信音声越しで女が何か言い終わる前に、高出力レーザーライフルの銃口から綺麗な光の束を発射した。

1―1―2日遅レ

―1／―

春は何時も穏やかだが、始まりである為に煩いところもまたある。現に目の前の教室がそんな状態だが、先に入って行った教師の一喝したあと途端にシンッと静まった。まるで封建主義の王が喝会の間へ入場したような静けさだ。

「いいぞ、入ってこい」
「はい」

その掛け声を聞いて、俺は適当に教室のドアをゆっくり開けていく。入ってみると、当たり前だが女子ばかりで。やはり、ＩＳ関係はどこに行ってもこんな感じか。世界初の男性ＩＳ操縦者も一緒なんだな。確か名前は織斑　一夏だったか。しかっし、まー。女みてーな名前だな。同じクラスになるなんてのは、考えてなかった。周りを見渡すと、当たり前だが皆一様にざわついている。

「皆も入学3日目になるが、2日遅れの新入生だ。それでは自己紹介をしろ」
「市隈　喜久です」

皆一様に俺の方を見る。派手な髪形だの、目の色のことや背が低いだのと適当に言っているのが聞こえた。どうやら好みかどうかを話し合っているらしい。そんなふうに見回せば担任の織斑先生は頭の額を手で揉んでいた。

「昨今の男どもはみんなこうなのか。自己紹介はそれだけか？みんな見ての通りだが、市隈の情報は昨日まで秘匿されていてな。私も今日になって知った次第だ。何か質問がある者はいるか？」

数人から手が上がる。適当に指された女子が立ち上がった。

「男性なのにＩＳが起動した理由はなんでですか！？」

此処に来るまでに、道中で何回も質問された内容だ。途中まで数えていたが、何回目なのかもう思い出せない。だるくてしょうがない。

「触ったら動いたんだ。それだけだよ」

本当はそんな曖昧な理由と違うが、それを言うわけにはいかない。

「趣味は！？」

「読書と寝ること」

「何で１日遅れて入学になったの！？」

「書類の申請と家庭内のごたごたで。織斑先生、もう良いっすか？」

いい加減うざったくなってきたので、横にいる教師２人に声をかける。すると、織斑先生は手を２度ほど手を叩いて、質問の終了を告げる合図を送り生徒を静まらせた。

「複雑な家庭事情があるらしいので、余り本人を困らせる質問はしないように。市隈、席は一番奥を用意したのでそこに座れ。あと、ガキではないのだから猫背はやめろ」

めんどくさいが、反抗しても意味がない。それに、品性方向を謳っているような学園では当たり前かもしれない。ああ、反りが合いそ

うにない。仕方がないとはいえ、どうして俺が一番嫌う場所へ放り込んでくれたのかね、あの姉さんは。

「どうした？早くしろ、先の予定がつかえる」

「あぁ、はい」

ふと、考え込んでいたらしく織斑先生に促されて席へ向かう。指定された席に着くと、興味津々と言った感じで横の女子が話し掛けてきた。ショーカットの似合う活発そうな容姿だ。

「これから宜しくね。私は貝田　啓子って言うの」

「ああ、宜しく。それにしても、やっぱりここは女子高だな。でも、教師は男子校みたいなのな」

貝田は振った教師の話題に嬉しそうにする。そして勢い良く話し始めた。

「織斑先生かっこ良いよね！！私も憧れてるの」

「ふーん。人気あんだな」

流石はブリュンヒルデだなんて呼ばれているだけあるのだろう。内戦地に派遣されて行ったら、さぞ一方的な戦果を上げるに違いない。

「それにね、前にいる織斑君て織斑先生の弟なんだって」

「へえ、両方ともすごいんだな」

俺はノートと分厚い電話帳みたいな教科書を鞄から取り出す。元々知識があるとはいえ、今更ながら一から覚えようという気になれない代物だ。

前を向けば始まっている1間目の授業。えらい勢いで、詰め込み式

の授業がスタートする。授業と俺は水と油のように反応し、授業が進行するにつれてどんどん眠気が強くなった。これが後、午前中に3時間か…。
俺は気合を入れると、何とか眠気を堪えて午前中を耐え切る。しかし、休み時間は全部魂が抜けたように机へと突っ伏した。

└┴┘└

「ちょっと、宜しくて？」

なんだ？この漫画から抜け出たような、ふざけた喋りかたしてるのは？まどろみの中で、そう思いながら顔を上げると金髪の海外人が俺の方を見ていた。顔立ちが綺麗だが、お高く留まっているのが感じでわかる。昼休みだと言うのに、飯を抜いて話し掛けても大丈夫なのか少し心配になった。ちなみに周りを見渡せば、皆昼食を取っている。

「誰だ、あんた？」
「まぁ、野蛮人に続いて貴方もですの！？このイギリスの国家代表候補生で学年主席のセシリア＝オルコットを知らないとは無知も甚だしいですわね」

オルコットっと名乗った女子は、呆れた口調で両手を上げながら肩を竦める。前言撤回、この外人は一度地面に頭を打ち付けたほうがいい。そう思うと同時に反面、俺はすごく感心した。日本語がペラペラだし、アクセントも上手い。こいつＩＳ乗りじゃなくて、通訳の方が向いてんじゃないの？いや。ここは優秀者しか入れない場所だから、これくらいは当たり前なのか。

「ふぁ。悪いけど、ごたごたで左も右もわかんないんだわ。それに、昨日は徹夜でもう倒れそうなんだ。それより、放課後あんたは暇な人？」

「そんな訳ないでしょう！！デートのお誘いならもう少し、気の効いた言い方をしなさいな。まあ、これでも忙しい身では――――

「ああ、デートの誘いじゃないし高圧的なのはタイプじゃないんだ。忙しいならいいや、お休み」

わざと言葉をぶった切って会話を終了させた。俺は知り合ったのは何かの縁と案内をお願いできるか聞いたが、本人は忙しいらしい。プラスにならない会話なら、迷わず睡眠をとる。俺は頭を下げると、再び眠りにつこうと瞼を閉じた。頭上では「くぬぬ」とか言う声から、オルコットの顔が真っ赤になっているのが連想できる。

「昨日の男といい、今日の貴方といい！！まだ話しは終わってません、起きなさい！！」

「痛ぇ！！何すんだ！！」

教室中にスパンといい音が鳴り、続いて俺の怒鳴り声が続く。こいつ、いきなり人の頭を殴りやがった。周りの視線が痛くてしょうがないが、この際気にしない。

「貴方が途中で話しを切るのが悪いのです。宜しくって？」

何が宜しくってだよ、決め台詞じゃないんだからさ。

「一つ聞いていい？」

「普段は貴方みたいな輩に答える口は持ち合わせていませんが、なんでしょう？」

「なぜにそんなに喧嘩腰？それともう一つ、あんた顔は良いけど性格ブスで男にもてなそうだな」
「な！な、なな！！」
「興奮すんなよ、事実だろ。それで話しの用件は何？」
オルコットの奴は一瞬で興奮が頂点に達したらしく、怒りで頬を染めているのがわかる。
「決闘ですわ！！」
「はぁ？嫌なこと言われて、怒るのはわかるけどそれはやりすぎだろ。イギリスは紳士淑女の国なんだろ？」
「昨日は祖国を！今日は私自身が侮辱を言われるなんて！！野蛮人の国の男は皆最低ですわね！！」
昨日をということは、残っているもう一人の男子の織斑一夏って奴とも既に揉めたのか。
「で、その最低の野蛮人もう1人とは決闘になったの？」
「何を言っているのです、当たり前でしょう。今度のクラス代表をかけて、決闘となりました。当然、貴方も受けるのでしょうね？」
「え、俺はやだよ。面倒臭いし、メリットないし、何より疲れそうだし」
「貴方、決闘を逃げると言うのですか！？」
「そうだよ、だから寝かせてくれ」
オルコットまるで信じられらないといった顔をしている。そんなことはやってられないし、ＩＳなんてものは出来る限り触れたくない。しかし、織斑一夏はこの阿呆の決闘を受け入れたらしい。こんな奴に乗せられて、案外と単純思考型なのか。

「…そうですか、ならば戦わざる終えないように引きずり出して差し上げますわ」
「ふーん、精々頑張って」
オルコットの阿呆は、やる気の欠片もない俺へと不敵に笑い席から離れて行く。俺は再び目を閉じると、ぬるま湯に浸かる感覚で頭を腕の上に乗っける。まさかこのイギリス人が意外と頭の回る奴だとは、この時の俺は考えていなかった。

1―3―ISノ在リ方

―2／―

「私セシリア＝オルコットは、クラス代表に市隈　喜久を推薦いたしますわ」

「ほう、理由を言え」

授業の開講一番で織斑先生に対し、そんな発言が飛び出した。俺がまるで状況が掴めない中で、反芻したように織斑先生が理由を聞く。

「昼間、彼とお話しをさせて頂いたのですが、是非出てみたいとおっしゃたので」

そう言って、俺の方を見ると『やってやったわよ、だからとっとと引きずり出されろ』という視線を感じた。嬉しそうに口元が笑ってやがる。俺はしょうがなく立ち上がると、前の教師2人の方を向く。

「今の発言は出鱈目です。俺は全くやる気は在りません」

「そうか。市隈に言ってなかったが、クラス代表を決めるのに推薦されれば拒否権は認められん。悪いが出てもらうぞ」

はぁ？何だよその理不尽な仕組みは。俺はそこで今日初めてイラッと感じ、反論してやろうと少し前屈みになった。オルコットに反論しても意味が無いので、織斑姉のほうを向く。俺の視線で感じたのか、織斑姉のほうも聞く姿勢になるのが解った。

「人権が認められるなら、拒否権を行使できるはずでが」

「悪いが、この場で拒否は認めん。私が黒だと言ったら、それが白でも黒だ。覚えておけ」
「ここでは、軍隊式が基本なんすか？」
「そうだ。ひよっこの状態のお前をたったの一年で鍛え上げなければならない。その場合に駄々を捏ねさせている時間があると思うか？」

くっだらねぇし、ふざけんじゃねぇ。そっちがその気だったら、こっちも好きなようにやらせてもらうぞ。俺は、こんなクソ面白くも無い状態にしてくれたオルコットの方を一瞥した後、今度は睨みながら織斑姉の方を見た。織斑姉は反対に面白いものを見たような顔をしている。

「納得が行かないところがあるけどやりますよ。そのかわり、俺を引っ張り出した張本人を捻った後は、今後その強制権は無しにして欲しいんすが」
「ほう、それはオルコットに勝てると言っているふうに聞こえるが」
「そうです。だって、人殺しの道具を使用することに喜びを見出すことしか出来ない人間に、一体何が出来るんです？」

俺がそう言った瞬間、教室の空気が凍ったような静寂に包まれた。当たり前なのだが、俺自身がそういう考えなのだからしょうがない。オルコットは自分の思い描いていなかったであろう俺の反論に吃驚したのだろう、口を半句させて言葉を失っている。見ると、今さっきまで笑っていた織斑姉の顔が怪訝見を帯びた表情になっていた。は、危ない思想の持ち主だと思ったかよ。

「それはどういう意味だ。お前の意見を述べてみろ」
「宇宙開発計画から国家間のミリタリーバランスへの転用変化がものがったってるでしょう。政治と軍はたった１０年ぽっち先より今

の目先に囚われる。それなら今のＩＳの現状なんてのは、政治の玩具でしかない。つまるところ、ここで学んだことで役立つのは、国家のていの良い体分を盾にして行う将来を見据えた戦争の準備と、紛争地帯等への投入がメインになると思いますよ。女尊男非なんて言葉で言うが、武器を持つのが男から女に代わっただけです。前で殺しあうのが男から女になった」

「もう一つ聞こう。アラスカ条約はどう解釈している？」

「あんなもの、所詮は人間が作ったもので神様が作ったのものじゃない。だったら破るのは簡単だし、変えるのも難癖つけて破れば良い」

授業が始まってたったの１０分。それだけで、周りの人間がみんなお通夜のように下を向いていた。中には睨むようにこっちを見据えているのもいる。だが、少し考えれば当たり前だ。たとえ国家代表にならなくても、戦争なんてものが始まれば人手は幾らでも足りなくなる。ここに通う人間は、全て予備軍になるのが関の山だ。そんな可能性を考えれば誰だって暗い気持ちになる。

「そうか。お前の解釈はよくわかった。では、その人殺しの仕方を学ぶ為にお前はここに来たのか？」

「学ぶ気なんてないですよ。３年経ったら適当に仕事でも探します」

３年間は、おいそれとどこの機関もＩＳ学園に介入できないのを知っている。今回この場所へ入らざるおえない状況にしてくれた奴らも、実際にここへは手を出しにくい。俺がここに来たのは、ただそれだけのためだ。

「３年経って卒業したら、どうするつもりだ？」

「どこかに所属するなんて論外ですから。国に捕獲されるなんてことになったら、世界の果てまで逃げますよ。当然そうします」

後ろ盾はないし、昔の出来事のせいで大手を振って歩けば即座に捕獲される。協力拒否なら実験動物の後は、ホルマリン漬けの最後が予想できた。織斑姉はしばらく黙っているが、沈黙した後に溜息をつくと再び俺の方を向く。

「お前の人生をどうこうしようとは思わないが、在籍中はオルコットに勝ったとしても私に従って貰う」
「それは考えさせてもらいます」
「いいや、従って貰う。答えはイエスだけだ」

……根競べしてもしょうがない。それなら、要領上手く逃げればいいか。俺は自分の中で放心を固めると、片方の手だけを上げて教師を見た。

「わかりましたよ、従います。イエス」
「もう一つ。ＩＳが兵器であることには変わりない。が、人殺しの道具だと言うのは今後一切、校内で口にするな。わかったら返事をしろ」
「イエス」

座れと促されて俺が席に着くと、何事も無かったかのように授業がスタートする。しかし生徒の殆どが授業に集中できない様子で、みんなそわそわしていた。

1―4_同室者

―3／―

一日のカリキュラムが終わると、そのまま教室に残るように言われていた。なので、今は自分の席でぼーっと外を眺めている。結局授業中のやり取りが原因で、クラスの生徒は1人として話し掛けては来なくなった。
隣で最初に話し掛けてくれた女子も一言も交わさなくなっている。当たり前のことだが、それでも幾分気が楽になった気がした。
ここにきている連中は、全員がＩＳに乗りたくて来ているエリート連中だ。決して、反対の意見を持つ者などいない。唯一の同性な織斑一夏は、長い髪を後ろでに束ねた女子に引っ張られ直ぐに退室していった。織斑一夏は俺に興味があるようだったが、連れの方が用事があるのか急いでいた感じだろうか。授業もだるいが、プライベートもかなりだるい3年間になりそうだ。さてと――

「市隈、待たせたな。寮に関して説明が必要だったのでな。山田先生、プリントを渡してやってくれ」

いつの間にか教室に入ってきた教師達は、俺に寮の規則がびっしりと書かれたプリントを数枚ほど渡してきた。朝に教室へ来る際、ちらりと寮があるのは確認している。ホテルのような建物で、無駄にお金が掛かっているような建物に見えた。
教師達の説明を受けながら書かれた文章に目を通していく。最後に俺の部屋番号が記載されている。ほう、女子寮しかないのでそこに住むしかないと。授業中は教師のほうが眉間の辺りを指で揉んでいた。まさか、今度は自分の方が揉むことになるなんて思わなかった

よ。

「これって、体裁的に不味くないですか？予算や異例ずくしなのはわかるんすけど」

「ぎ、疑問なのは先生としても理解しているんですよ。織斑君も戸惑っていましたが、ルームメイトの子とは今のところ問題なくいっているので。ですから、しばらくの間だけ。ね？」

「そういうことだ。いずれ、部屋はお前と織斑の２人部屋にする。それまでは指定された部屋で女子と一緒に過ごしてもらう。わかったら返事をしろ」

はあ？まさか織斑　一夏の奴は、既に女子と同室で過ごしてんのかよ。うらやましいよりも、気疲れの方が多いし問題を起す確率が高いんじゃねーの。しかし、一週間以内に問題起さなかったら、あいつはゲイ確定だな。

「イエス。で、俺は誰と一緒なんです？このクラスの人間は、みんな俺を遠ざけたいみたいですけど」

「それは、お前の自業自得だろう。自分で何とかしろ。私も山田先生もお前が言ったことは看過できんし、認めてはいないしな」

「市隈君の言いたいことは確かに考えさせられますが、それをこのクラスを預かる身としては容認できません」

山田先生は立場では認められなくて、織斑姉の方は認めないのか。

「で、結局俺の相方は誰なんすか？」

「それは自分で確かめてみるんだな」

織斑姉は不敵に笑い、俺は直ぐに山田先生の方を向く。すると、山田先生はすいませんと言って困った顔をした。なんだよ、織斑姉に

口止めされてんのかよ。やな感じだ。

「市隈、山田先生を萎縮させるんじゃない」

「へいへい」

「山田先生も、もう少し生徒の前では堂々としてくれないか」

「すいません」

山田先生はしょぼんと小さくなった。本当にこの人は教師なのか。俺が再び織斑姉の方を向くと、そこで何故か織斑姉は更に深い笑みを刻んだ。明らかに不敵から、からかいの笑みに変わっている。俺は背中にゾクリとした悪寒が走った。

「お前の鍵は既に部屋に置いてある。精々、相手に理解して開けて貰うことだ」

「はぁ！そんなん開けるわけないじゃないですか。野郎を認めて部屋に入れる女子なんて、普通いないでしょ」

「そうか、ならお前は私の部屋で寝泊りするか？規則正しい生活を送らせてやろう」

「絶対にご免被らせてもらいます」

どんなに美人だろうが、こんな軍人もどきの織斑姉と一緒じゃ1日で脱走する。ましてや横で自慰行為なんてなら絞め殺されかねない。くそ、後で絶対にやり返してやる。

「市隈君の部屋番号はプリントに書いてありますので、直接向かってください。荷物はフロントにで預かっている筈ですからそこへ取りに行ってくださいね」

「あい」

俺は教師達に軽く一礼して教室を出ると、そのまま割り当てられた

仮住まいに足を向けた。

＼／／／

何てことはない、部屋を間違えたんだ。そう思いたい状況が、俺の目の前で展開していた。寮は一つしかないのだから間違えようもない。部屋がある階も字を読んで理解していた。部屋の番号は４桁で、一文字だけ読み間違えた可能性があるかもしれない。だから３度は見直した。だから３度も見直したんだ。

「貴方、私の部屋まで挑発に来ましたの？」

ドアを叩いて開けられてみれば、出てきたのは今日喧嘩したオルコットだった。当たり前だが、互いが喧嘩腰の対応になる。よりにもよって仕組みやがったのか、あの織斑姉のクソ教師が。俺は今すぐ部屋を変えろと言いいたいのをぐっと飲み込んだ。そして、無言のまま教室で貰ったプリントを丸々手渡ししようとする。受け取ろうとしなかったが、オルコットの顔に近づけて認識させた。

「まったく、なんですのよ！！」

オルコットは引っ手繰るように俺の手から奪い取ると、真面目にプリントに書かれた内容を読み始めた。そして最後まで読みきると、部屋番号が書かれているのを確認したらしい。美人特有の綺麗な笑顔のままドアを思い切り勢い良く、これでもかと言うくらいに気持ち良く閉め切った。

人間誰だって焦ったら変な行動に出るはずだ。思わず俺はドアを叩いていた。

「待てよおい！！ざっけんな、俺の意思で決まった部屋割りじゃねーんだよ！！文句なら織斑の奴に言えよ！！」
「冗談は顔だけにしておいて下さいな！！誰が貴方のような野蛮人を入れるとお思いですの！！」
「顔はかんけーねだろ！！そんなこと、わかりきってんだよ！！俺だって何が哀しくて、お前と同じ部屋なのか理解に苦しんでだよ！！」
「だったら、野宿でもしなさいな！！まあ、他に貴方を入れてくれるご友人の方でもいれば、泊まれるよう交渉してみなさいな。もっとも、そんな奇特な方が居ればの話しですが？」

うざい、うざ過ぎる。結局は不毛な会話だった。俺はそう思って、あたりを見回す。今が5時前、人の出入りは殆どない。何人か遠巻きにこっちを見ていたが、俺が顔を向けると蜘蛛の子散ったようにそ知らぬ顔して去っていった。自分の行ったこととはいえ、やな環境だな。俺は一分程度の間を開けて、オホンと一息するともう一度だけ部屋のドアを叩いた。

「オルコットさん、同じクラスの貝田です。織斑先生から伝言を預かって来たの。開けてくれないかしら？」

俺の口から朝に知り合った貝田の声が響く。声を真似やすかったので、すんなり言葉を言うことが出来た。

「はい、ちょっとお待ちになって下さいな」

オルコットは当たり前のように対応し、ドアを開ける。そしてもう一度ドアを締め切ろうとして。俺はすかさず半身をドアと縁の間に滑り込ませた。俺とオルコットの押し問答が始まる。

「確かに貝田さんの声がしたはずですのに！！」
「確かに貝田さんの声がしたはずですのに！！」

オルコットの台詞と声を真似てやり、言われた当人は驚愕の様相を呈している。

「似てるだろ？特技じゃないけど、俺の喉の構造は不思議と女性に近いんだよ」

本当は別の理由があるけどね。相手の顔が余りにも面白かったので、今度は織斑姉の声を真似てやることにしよう。

「私としてもしょうがないとは思っているが、何せ上の判断でな。部屋がお前のところしか空いてなかったのだ。悪いがオルコット、しばらく面倒見てやってくれ。ああ、なんなら行く所まで行っても構わんぞ。自己責任が私のモットーだからな。そして仲良く――――

ゴールインすれば良いなんて言おうとしたら、頬に衝撃が走った。視界が一瞬だけ真っ黒になる。口の中で鉄の味が広がった。俺は床に転がり、痛みを忘れて思い切り顔を上げる。そこには仁王立ちして悪鬼の形相をした織斑姉がいた。横では山田先生がおろおろ泣きそうな顔をしている。オルコットはわけがわからないと言った様子で、不安そうに様子を見つめていた。

「喜べ市隈、今度なめた真似をしたら顎を砕いてやる」
「上等だ、クソ教師！！」

俺が叫んだ時には、織斑姉が屈み込んでいた。そのまま顎に衝撃が走る。視界で、２発目のアッパーが俺の顎に炸裂したのは確認でき

た。俺は仰け反り、再度の転倒をする。眩しい天井のライトが目に入ってきた。
女性の腕力だからだろうか、俺が気絶するには威力が足りなかったらしい。手を使わないで体のバネで勢い良く跳ね起きると、そのまま首を軽く鳴らす。

「ほう、意外と打たれ強いな」
「あんたが非力なんだよ」
「面白い、一発だけ全力で行くぞ」

織斑がそう言った瞬間、俺の視界は歪みながら真っ赤に染まり、次いで黒く変色した。

／／／

寝起きは顔と腹の痛みで最悪だった。ずきずきと痛む部分を擦る。腰から上を起き上がらせると、周りが薄暗いことに気づいた。ライトがほのかに光っていて、下を向けば自分がベッドに寝かされているのが理解できた。まさか、気絶させられたのかよ。

「痛ぇな、たく。どんな腕力してんだかあのメスゴリラは」
「そんなことを言っているから先ほどのようになるのです。それに、織斑先生なら貴方の横に居りましてよ」
「うそ！！」

冷や汗だらだらで、一息に横を向く。居ない。……俺はいつの間にか目の前に居るオルコットを半眼で見た。いい性格してやがる。当の本人は何事もないように、２つあるベッドの内で俺の居る反対の

方へ腰掛けた。手には紅茶の入ったカップが添えられている。イギリス人と接するのは初めてだが、本当に紅茶が好きなんだな。

「織斑先生と山田先生が言われるので、しょーがなく部屋の使用を許可するのですから。しょーがなく！！ですからね。もし如何わしい素振りを少しでもしたら、即っざに！！部屋から叩き出しますから！！」

「大丈夫だって、安心しなよ。俺はお前にひとっ欠片も魅力なんて感じちゃいないから。性格ブスが直らない限り周りの男は声もかけないだろうしな」

「貴方って人は！！せっかく介抱して差し上げたのに、礼の一つも出来ないなんて！！ほんっとうに、野蛮人の国は礼儀の一つもなってませんのね！！」

「お前の態度が尖り過ぎで、言う暇がないんだよ」

言われて周りを見渡して見れば、洋風の家具が幾つも確認できる。どうやらオルコット私物に見えた。しかし、それのせいで、部屋面積が異常に縮んでいる。天蓋付のベッドなんてどこから入れたんだよ。文句の前に、俺はとりあえず部屋に入てくれた事と介抱だけは心の中で感謝した。

「たっく、朝からここまでの時間で一週間分の疲れが溜まったよ。顔は良いんだから、もう少し丸くなれば可愛いのに。もったいな」

「な！！」

オルコットは赤面と怒りを混ぜたような微妙な表情でこっちを見た。何だこいつ、俺の言葉に動揺して。そんなに、男性経験が少ないのかよ。どんだけ純粋なんだ。

俺は気にせず痛む腹部を抑えながら立ち上がると、ハンガーに掛けてあった制服の上着の内ポケットを漁る。すると固い感触に指先が

当たった。あったあった。それを取り出すと、見ていたオルコットが思わず違う意味で悲鳴を上げる。ひぃっといった感じで、顔が蒼ざめていた。

「ちょっと、貴方は何をしれっと出しているんですの！？」
「何って煙草とライターだけど。酒はばれそうだったから、持ち込んでないけど」
「貴方、何を考えてますの？ここで吸ったら、臭いで直ぐに他の方がわかってしまいますわよ！！」
「だったら屋上で吸えばいいじゃん。こちとら、１４から吸ってんだから今更辞められないしな。イギリスじゃ１８から吸えるんだっけか？裏じゃコカインも買えるって聞いてるけど。なんならお前も吸うか？」
「私がそんなもの吸うわけないでしょう！！それに私が今の状況を許すとお思いですの？」

生真面目ここに極まれりってか。さすがはＩＳ学園だ、品性方向がしっかりした生徒が集まってるな。俺は何も答えず靴を履くと、部屋の鍵を持って廊下へ続くドアを開けた。

「待ちなさい、話しはまだ終わってなくてよ！！」
「良かったじゃん。あんた、俺の弱みを見つけられたぞ」

オルコットは、はぁ？と言った感じでポカンとした顔をする。俺はそのまま扉を閉めて屋上へ向かった。
屋上は鍵が掛かっていたが、無理やりこじ開けて外へ出る。涼しい風が頬を撫でつけた。人目につかなそうなところに腰掛けると、煙草に火をつける。蛍火のように赤い点が浮き上がり、紫煙がゆらゆらと宙を漂った。一息ついて、しばらくぼーっとする。次いで自然と言葉がもれた。

「なんで姉さんは、こんなところに放り込んでくれたかね。ここは俺の肌に合わないよ」

言葉は響くこともなく、すっと霞の如く消えていく。もう少しこの場所にいようか。俺は寝転がると、適当に買っていた缶ジュースのプルタブに指を差し込んで開封する。缶独特の開封音が小さく鳴った。

1―5―モウ1人ノ男子

―4／―

俺が起きるとオルコットはまだ寝息を立てていたので、静かに着替えて部屋を出てきている。朝食の時間には早かったが、そちらの方が都合が良かった。
それに昨日の昼から食べていない為に、お腹は鳴りっぱなしでしょうがない。俺は女子の間で話題が挙がると、伝播するのが早いと感じている。それが面白い話題であればあるほどだ。きっと俺に関する噂は悪い意味で、よく浸透して伝わっているにちがいない。
配膳を取ると適当な席に着いて朝食を取り始める。周りは朝から部活動があるであろう、数人の生徒だけが疎らに座っていた。ゆっくり食べていると、だんだんと生徒の数が増え始める。

「横、空いてるか？確か市隈で合ってるよな？」

顔を上げながら横を見ると、織斑一夏が手に朝食を持って俺を見ていた。次いで何か痛そうなものを見たようにして顔を顰めている。
隣で一緒に食堂へ来たであろう女子も意外なものを見たように、口に片手を当てて驚いた顔をしていた。俺はと言うと、片方の頬が青みがかっていてね。その上から伴奏こうを貼っている状態だ。

「…頬のところ、どうしたんだ？」
「お前のねーちゃんに殴られたんだよ。三発目には、腹へ喰らって気絶した。随分鍛えてんのな、あの人。久々に良いのもらったよ」
俺が笑いながら話すと、織斑弟もつられて苦笑いながら「千冬姉は

怒らすと怖いんだよ」と言った。
ふーん、傍目から見ても姉とは随分性格が違いそうだな。織斑弟と連れの女子は俺の対面に座り、朝食を取り始める。

「あー、えっと…」
「一夏でいいよ」
「そうか、なら俺も喜久でいいから」

一夏はフレンドリーに話し掛けてくると、気さくなタイプなのかと適当にあたりをつける。俺はせっかくなので連れ添っている女子にも話し掛けることにした。

「そっちの人は？悪いけど、昨日はごちゃごちゃしてて何も覚える余裕無かったんだよね」
「篠ノ之　箒だ。呼び方は適当で良い」

篠ノ之は俺を悪印象に捉えていない話し方で接してきた。何で昨日の授業のことで、嫌悪感を持たないのか疑問が湧く。2人とも根っからのお人よしなのか？そんな事を考えていると、ふいに篠ノ之が話し掛けてきた。

「昨日は織斑先生と何かあったのか？」
「寮の部屋の入り口で同室の奴と人悶着合って、そこに来た一夏のねーちゃんと更に喧嘩になった。けど、ワンサイドゲームで3発喰らってノックアウトだ。お陰で顎が痛くて上手くご飯がかめない」
「まあ、喜久は昨日あれだけＩＳ批判してたからな。あんまり良いイメージもたれてないかもな」

一夏は欠伸をかみ殺しながら適当に答えると、コップに注がれた飲み物を口から注ぎこむ。俺も痛む顎を我慢しながら、適当にパンを

噛み千切った。3日は柔らかいもののお世話になりそうだ。

「市隈、同室の相手と言うのは誰だ？」

当然の疑問のように篠ノ之が投げかけてきた。

「ああ、高慢ちきのイギリス人だ」

2人ともげっとなり、俺のくじ運の無さにご愁傷様といった表情を浮かべている。そこで、いきなりこつりと頭を硬いもので軽く叩かれる感覚がした。

一夏と篠ノ之の顔が変わり、少し頬が引きつった顔をしている。俺が振り返って見ると、そこにはとても作り笑いしてますといった表情のオルコットが俺を見下ろしていた。

「おはようございます、なにやら私の話しをしていたようですが。何を話していたのです？」

「なんだよ。俺は、お前のいびきが酷くて寝れないって話しをしてただけだ」

「へぇ、そうですか。てっきり私は貴方が屋上でしていた行為をそこの野蛮人にも進めているのかと思いましたわ」

このやろう。お前、俺に対しての切り札を切るのが早すぎだろう。こっちが見せた弱みをどこで使ってくるのか、駆引きの仕方を見てみたかったのに。どんだけ気が短いんだよ。少し呆れた表情が顔に出ただろうが、気にしないでいることにしよう。オルコットの奴は今度は心底嬉しそうにしている。俺の呆れ顔を嫌そうにしている表情ととったのだろうか。

俺は最後の一口を食べ終えると、席を立つことにした。が、オルコットは俺が立ち上がると同時に俺の肩に手を置く。一夏と篠ノ之も

何だといった表情をしている。

「私はこれから食事なのですが、膳を取りに行って並ぶのが、些か疲れますのよね。取ってきてくれません？」

「そんくらい自分でやれ」

「あら、外見れば今日はとても晴れていますのね。どこでも気持ち良く過ごせそうですわ。人の目の届かない所でも。ねぇ？」

どんだけ、揺さぶるつもりだこのやろう。俺は中指を立てながら、オルコットの顔面へ持っていく。

「お前、絶対に後ろから刺されるタイプだろ」

俺は捨て台詞を残してトレイを持ち上げると、一夏と篠ノ之は理解の追いつかない表情でぽかんとしていた。しょうがなく、イライラを溜めながらもう一度生徒が並んでいる列の方を目指すことにする。

「それと」

「まだ何かあんのかよ？」

首を捻って顔だけオルコットに向ける。

「私の名前はセシリア＝オルコットです。お前ではなくオルコットとお呼びなさい」

「面倒臭せーよ」

「ついでにた・ば・すこもとってきてくれません？」

「わかったよ、オルコット！！」

半ばやけくそ気味に答えて俺は生徒の並んでいる列へと向かう。そして、まったく可愛げのない対応をしてくるオルコットに俺は不快

指数を強めていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5733z/

IS　_ロスト_ナンバリング

2011年12月19日02時51分発行